

いわき市立桶売小学校「学校だより」



令和3年3月11日(木) 第52号 (発行者 校長 遠藤 修)

<教育目標>

- ☆進んで学ぶ子ども(知)
- ☆健康でたくましい子ども(体)
- ☆みんなで助け合う子ども(徳)

<校章の由来>



外形は学校を取り囲む山々を表し、その内側には健やかな成長と社会貢献を願い、杉の若芽が描かれています。

いのちの集会

東日本大震災

10年目のこの日に
～ 校長講話から ～

2011年3月11日午後2時46分、宮城県沖を震源とするマグニチュード9の大きな地震が発生し、東北の太平洋側を中心に大きな被害を受けました。東日本大震災です。

いわき市の豊間・薄磯・沼の内地区は8mを超える津波に襲われました。学校やたくさんの民家、商店が流され、200名以上の命が奪われました。

薄磯地区の高台に、「記憶石」という石碑が建っています。

震災から得た教訓や経験を次の世代へ途切れることなく繋げて行く、「記憶石」はその思いを形にしたものです。碑に刻まれている「灯台から子どもたちが手をふる絵」は、デザイナーを夢見ながらも東日本大震災の津波で命を落とした地元の小学生が描いた「塩屋埼灯台」です。

幼いころから見つめ続けた海と灯台に抱かれて、少女は天国に召されました。豊間小に通う10歳の女の子は、10年前、東日本大震災の津波で命を奪われました。絵が大好きで、絵がとても上手で、大人になったらデザイナーになりたいと夢見ていました。空と海と灯台を生き生きと描いた彼女の絵は、永遠に私たちの心に刻まれ続けます。

震災の激しい揺れが来た時、彼女は学校帰り海沿いのお婆さんの家にいました。弟を保育園に迎えに行こうとしたお父さんが車で立ち寄ると、家の前を出ていたお婆さんが「一緒にうちにいるから大丈夫」と言いました。お父さんは弟を保育園でピックアップし、お婆さんの家に戻ろうと近くに車を止めた直後、黒々とした波が堤防を越えて迫り来るのが見えました。お父さんは命からがら高台に車を走らせました。女の子とお婆さんを車に乗せることはできませんでした。

お婆さんの遺体は家のそばで、女の子の遺体は1週間後に塩屋埼灯台を南に回り込んだ海辺で見つかりました。

悲しみに暮れる両親に3カ月後、福島海上保安部から連絡がありました。「娘さんの絵をお返ししたい。」コンクールで入賞した絵でした。通常は返却されないのですが、報道で女の子の死を知った海上保安部の人たちが「親御さんに返そう」と思い立ったのでした。

その後少女の絵はハンカチになりました。この10年間でハンカチは1万枚以上売れ、収益は全て震災義援金として寄付されています。

「夢だったデザイナーの仕事がずっと天国でやっているんだな。」

お父さんはそう思っているそうです。 — 実名を伏せて一部引用 津波犠牲の10歳少女と灯台をめぐる物語 (2014/2/23 yahoo ニュース)

いわき市の東日本大震災で亡くなった方は468名。この女の子のように地震による津波や土砂崩れなどで亡くなった293名のほかに、避難による病気の悪化などで亡くなった関連死の方が138名、行方不明のまま亡くなったとされた方27名が含まれます。

この少女だけでなく、468名の皆さんそれぞれに生きてきた物語があり、叶わなかった夢もあったはずです。

今日でちょうど10年が経ちました。見学学習で見えてきたとおり、少女のお婆さんの家があった薄磯地区はきれいに整備され、高台には住宅や避難公園ができています。

記憶石の説明文にはこう書かれています。

時間の経過とともに、私たちの記憶を伝えるのは難しくなってきます。震災の記憶、教訓や経験を風化させず(忘れず)、次の世代、また次の世代に連綿と(途切れることなく)繋げていくために私たちにできること、それは、「亡くなった方の分も生きる、そして伝えつづける」こと。

自分自身の命を守るために、私たちの子ども達、またその子ども達が同じような悲しい目にあわないために、10年前に何があったのか、しっかりと学び、伝えてほしいと思います。

リアルタイム線量測定システムの数値(校庭)

0.083 μ Sv/h 3/11 10:20

(文部科学省HPの放射線モニタリング情報)

<http://radioactivity.nsr.go.jp/map/ja/>

桶売小学校 電話 0246-84-2230

Fax 0246-84-2240

在籍児童数 男子2名 女子2名 計4名

<https://iwaki.fcs.ed.jp/桶売小学校>

